

既存捕獲手法の向上 くくりわなによる捕獲について

1. 目的

平成 20 年度秋のドライブウェイ閉鎖後より、くくりわなを用いた捕獲を開始した。くくりわなを用いた捕獲手法は非選択的な捕獲手法であり、捕獲にはニホンジカの行動特性が反映されるとともに、ニホンジカ以外の種を捕獲する可能性もある。

本年度は、年間を通じた捕獲を実施し、大台ヶ原利用者の安全を確保しながら効率的な捕獲が可能であるかを確認することを目的として、利用者閑散期を対象とした試験捕獲を実施してきた。

2. 実施状況

(1) 実施時期及び捕獲結果

くくりわなを用いた個体数調整、試験の実施状況を表 1 に示す。

表 1 平成 21 年度個体数調整実施状況

期間	捕獲頭数	のべ設置基数	備考
4 月 12 日～4 月 21 日(8 日間)	19 頭	549	ドライブウェイ閉鎖期
6 月 16 日～7 月 15 日(21 日間)	13 頭	378	試験
9 月 14 日～10 月 2 日(12 日間)	14 頭	446	試験
合計	46 頭	1,373	

(2) 捕獲に関係する要因の検証

① 出没状況と捕獲状況

自動撮影カメラの撮影枚数、撮影頭数および捕獲頭数の関連性の検討を行った。撮影枚数と撮影頭数には関連性が見られたものの(図 1)、捕獲頭数との関連性は確認できなかった。

② くくりわな設置位置による捕獲状況の違い

くくりわなの設置位置は主に中道付近とした。周辺環境はおおまかに「大規模なササ草原が近くにある場所」と「森林が広がる場所」とに分けられる。「大規模なササ草原が近くにある場所」のくくりわな基数あたりの捕獲数は 0.04 であったのに対し、「森林の広がる場所の捕獲数」は 0.03 と、顕著な差は見られなかったが、より草原に近い緩傾斜である地点 4、地点 6 で多く捕獲されていた(図 2、図 3、図 4)。

表 2 環境別のくくりわな基数あたり捕獲数(6～7月)

周辺環境及び地点	大規模なササ草原が近くにある場所 ②③④⑥⑬⑭	森林が広がる場所 ⑩⑪
のべ基数	273	105
のべ捕獲数	10	3
のべ基数あたりの捕獲数	0.04	0.03

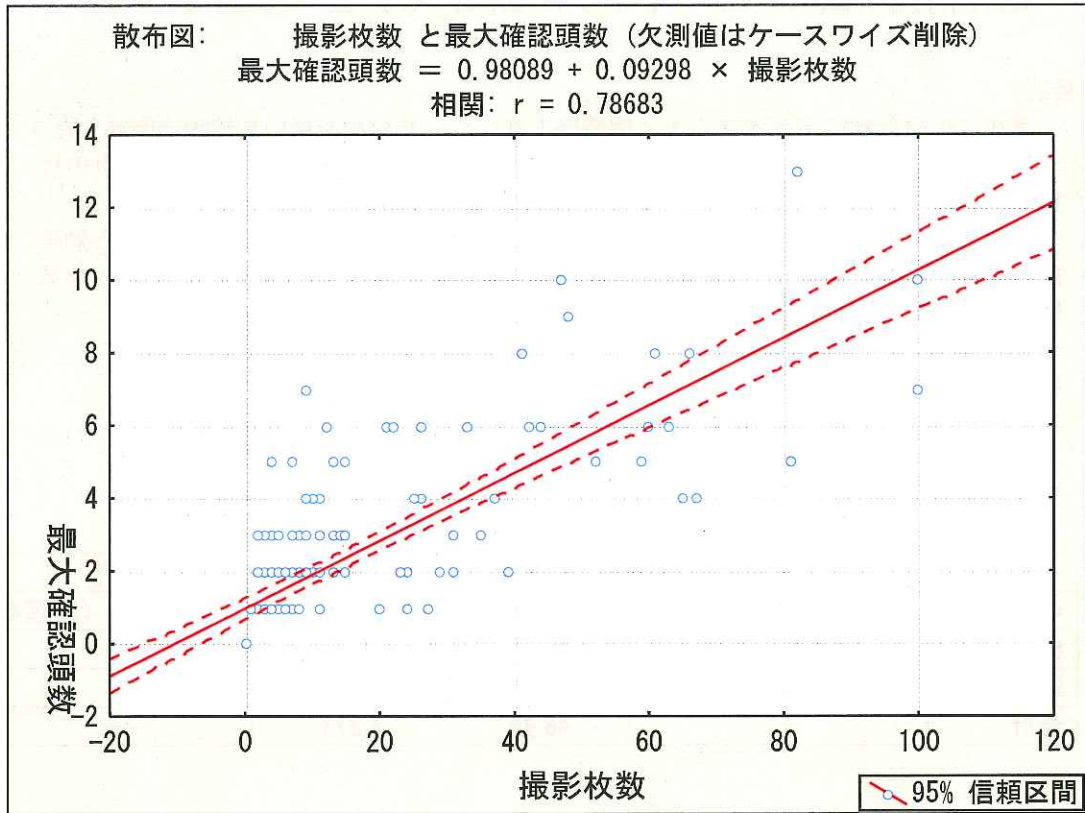


図1 自動撮影カメラの撮影枚数と撮影頭数 (6~7月)

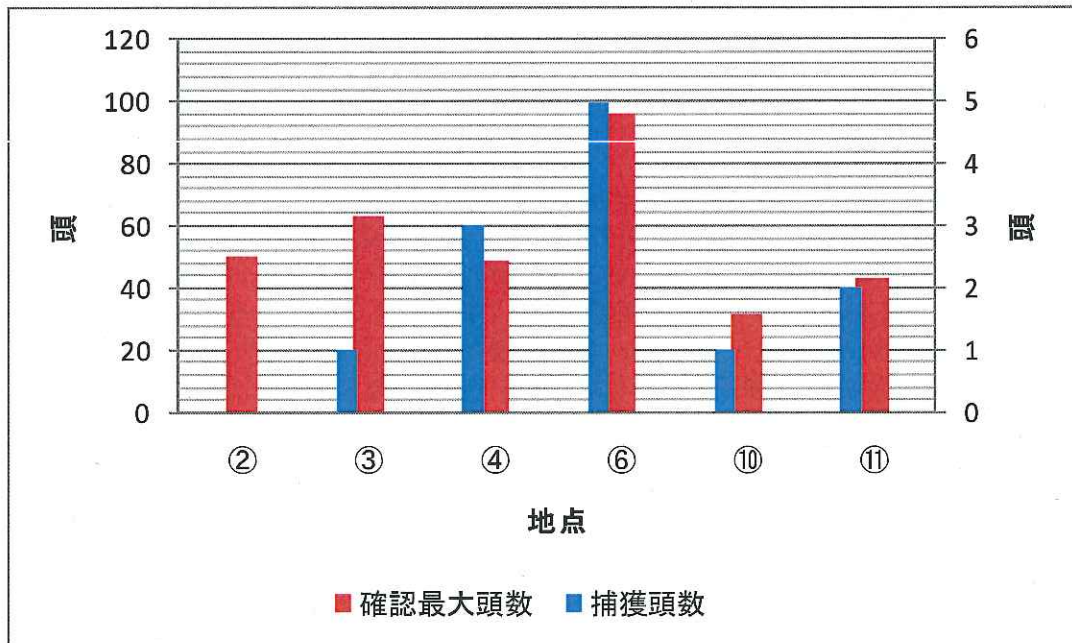


図2 地点別の個体確認最大頭数と捕獲頭数 (6~7月)

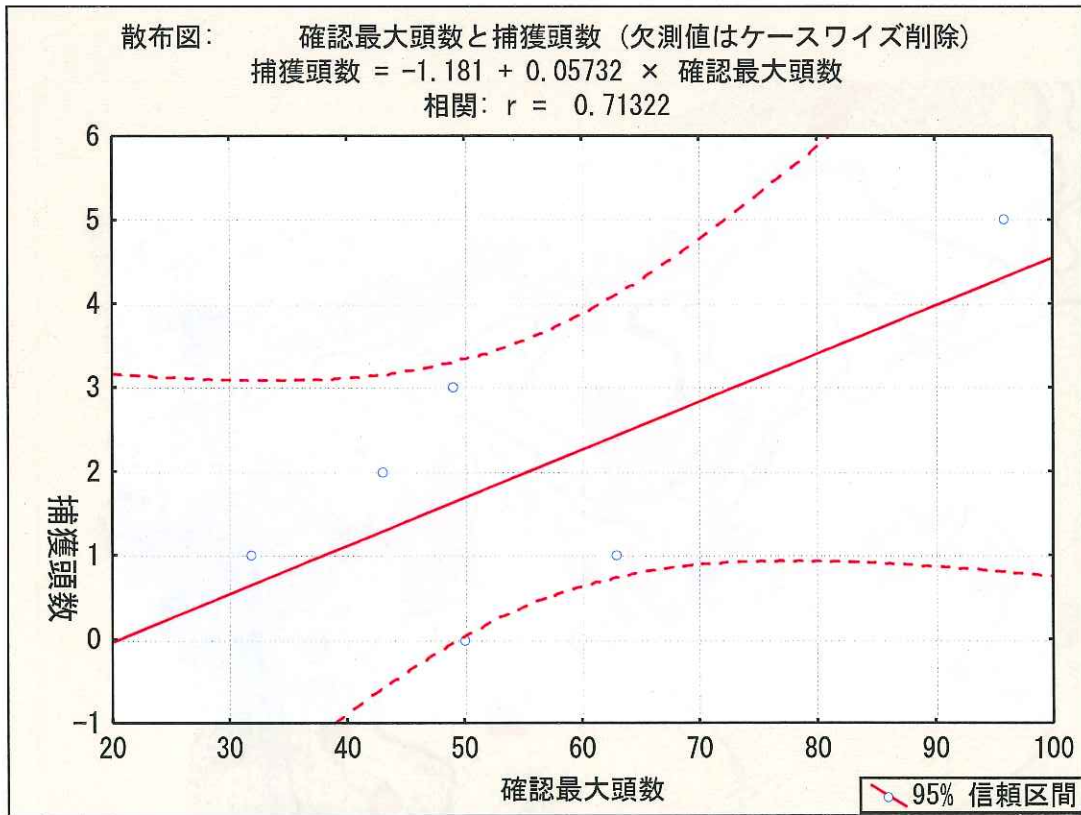


図3 確認最大頭数と捕獲頭数の関係

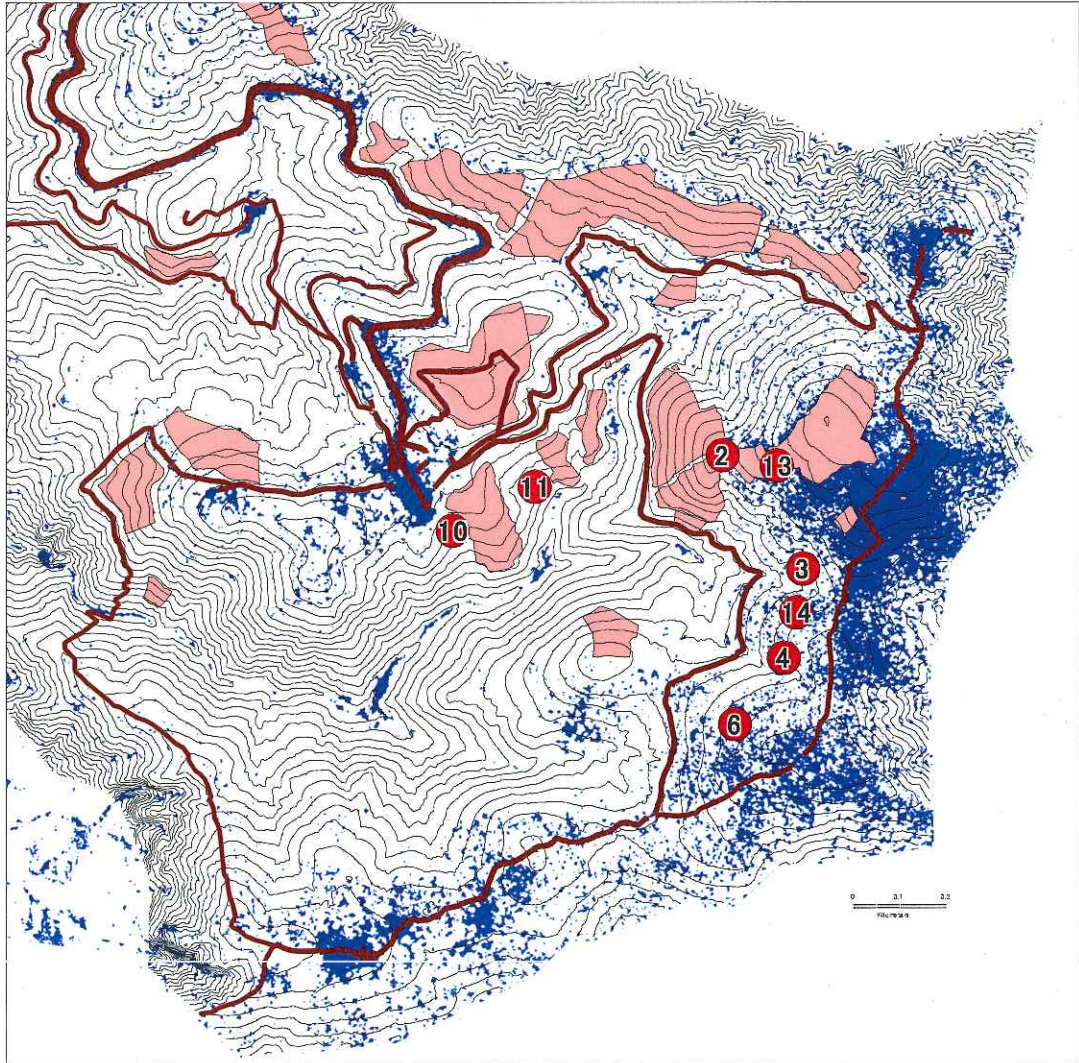


図4 くくりわな設置地点 (6~7月)

- : ササ草地、■ : 防鹿柵
- : くくりわな設置地点・番号

(3) くくりわなの種類の検討

ドライブウェイ開放期間のくくりわな試験では、利用者の安全面を考慮し、日中のくくりわなの稼働を停止して稼働させた。この際、早朝にわなの稼働を停止、夕方にわなの稼働を開始するため、1日2回、くくりわなを操作する必要がある。人が林内に入り作業を行うことによって個体の警戒心を高めてしまうことが考えられたため、自動で稼働および停止ができるくくりわな（自動制御装置付三生式）を6基導入し、従来のくくりわな（シシキラー）との比較を行った。

①方法

設置地点 13、14 において、9月15日～18日、9月28日～10月2日の期間、各地点3基、計6基のくくりわなを交互に設置して捕獲を行った。

②結果

従来のくくりわなでは4頭、自動稼働のくくりわなでは2頭が捕獲された。自動撮影カメラでの警戒の状況の確認は、豪雨が続いたため機材が正常に稼働せず、比較に値する撮影はできなかった。撮影ができた数個の動画ファイルでは、両者のくくりわなともに個体の接近が確認されたこと、くくりわな周辺を警戒しながら誘因餌を採食していたことから両者のくくりわなの操作の違いによって、接近、警戒の点については顕著な差異は無いと推察された。

一方、くくりわなの設置に際しては、自動稼働のくくりわなのほうがより広い面積の穴を掘る必要があるため、労力の点では従来のくくりわなの方が適していた。